

国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC : International Coalition of Library Consortia)

2012 年秋季会合参加報告

高橋正江, 柴田育子

抄録：2012年10月、オーストリア共和国ウィーンにて国際図書館コンソーシアム連合（ICOLC）2012年秋季会合が開催された。今回の会合では、投資家の視点による出版社評価、従量制価格モデル、オープンアクセス、コンソーシアムの今後の役割、ビッグ・ディールへの考察、ヨーロッパのコンソーシアム活動、出版社（JSTOR）プレゼンテーション、SCOAP³進捗報告など合計12のセッションが行われた。本稿ではその概要を報告する。

キーワード：図書館コンソーシアム、国際図書館コンソーシアム連合、ICOLC、電子ジャーナル、電子ブック、共同ライセンス、従量制価格モデル、オープンアクセス、ビッグ・ディール、APC、PDA

1. はじめに

国公立大学図書館協力委員会の派遣事業の一環として、2012年10月15日から10月17日にかけてオーストリア共和国ウィーンにて開催された国際図書館コンソーシアム連合（ICOLC: International Coalition of Library Consortia）2012年秋季会合に参加した。ICOLCの会合は、春に北米、秋に欧州で年2回開催されている。これまで、日本からは2002年～2012年の北米会合、2003年～2011年の欧州会合に参加した実績がある¹⁾。

2. 開催状況

会議名：国際図書館コンソーシアム連合2012年秋季欧州会合（ICOLC European Meeting 2012）

開催日程：2012年10月15日～10月17日

開催場所：University of Vienna, Juridicum / Faculty of Law, ウィーン（オーストリア共和国）

参加者：24カ国84名（内訳：カナダ9名、スウェーデン8名、デンマーク・ドイツ・フランス各6名、オランダ・日本・ノルウェー各5名、アメリカ合衆国・イギリス・フィンランド各4名、チェコ・トルコ・リトアニア各3名、イタリア・オーストリア・ブラジル各2名、イスラエル・エストニア・ベルギー・スロベニア・セルビア・ルクセンブルク・ロシア各1名）

3. アジェンダ（議題一覧）

10月14日（日）

オープニングレセプション

10月15日（月）

セッション1：2013年価格調査報告

Battlefield Survey 2013

ISTEX²⁾ プロジェクト（フランス）

ISTEX-the French National Licenses Project for Backfiles

セッション2：事例報告

News from the Battlefield II

セッション3：投資家の視点による出版社評価

The Stock Market View of STM Publishing with a focus on Europe

セッション4：従量制価格モデル

The Struggle for Value-Based Pricing

セッション5：オープンアクセス

Reports from the Open Access Battlefield

10月16日（火）

セッション6：ライセンス契約の動向

Future Trends in Licensing

セッション7：コンソーシアムの今後の役割

Consortia Business and their Future Role

セッション8：分科会

Are Big deals here to stay?

Does Patron Driven Acquisition save money?

5% is Perfect. Or not?

SCOAP³ Calculation Clinics: How to calculate re-direct pledges

セッション9：分科会まとめ、ACS戦略タスクフォース

Breakout Sessions Summaries

ICOLC ACS-Strategy Task Force

10月17日(水)

セッション10:ヨーロッパのコンソーシアム

Latest from Continent Consortia

セッション11:ベンダーグリル(JSTOR)

JSTOR Grille

セッション12:一般報告ほか

General Business Session

4. 議題概要

例年欧州で開催される ICOLC の秋季会合は、欧州の参加者が大多数を占める。今回、56 のコンソーシアムの参加のうち 44 が欧州、4 がアメリカ合衆国、6 がカナダのコンソーシアムであった³⁾。今会合では、欧州財政危機の影響を直接受けた各国コンソーシアムの事例報告やオープンアクセス(以下 OA)の動向、ライセンス契約とコンソーシアムの今後の役割、ビック・ディール終焉に向けての対策など将来を見据えた発表と意見交換等が 2 日半、合計 12 のセッションで行われた。

4.1 Battlefield Survey 2013 及び ISTEEX-the French National Licenses Project for Backfiles (セッション1)

今回の ICOLC 秋季会合前に参加館に調査した、2011 年と 2012 年とを比較したライセンス交渉の評価について発表があった。各国のコンソーシアムの回答数は昨年 of イスタンブール会合より減ったようだが、今回は JUSTICE 事務局も回答している。

2012 年のライセンスで特徴的なのは、エルゼビアなどの商業出版社よりも、ACS (American Chemical Society) などに代表される学会の出版社の価格上昇が顕著なことであった。また出版社と OA 誌について交渉しているかどうか今回の調査にあったが、全体的に OA 誌の APC (Article Processing Charge: 論文投稿料) についてはごく一部のコンソーシアムしか交渉は行っていないようだった。

その後 Couperin (フランス)⁴⁾、ABES (フランス)⁵⁾ よりフランスのナショナルライセンシング、ISTEEX プロジェクトに関して発表があった。まず ABES より ISTEEX プロジェクトが始まる前に行われていた国レベルのライセンス交渉について説明があった。これまで ABES は日本と同様、Springer のバックファイル等を購入した経緯があったが、現在その利用を大学、研究所だけでなく公共図書館でも使えるように整備をすすめている。

Couperin からは 2013 年から本格的に始まる

ISTEEX プロジェクトの説明があった。ISTEEX プロジェクトは 3 年間で総額 5,500 万ユーロの予算がついている。2013 年 4 月には出版社と交渉に入る予定だが、どのバックファイルを購入するかの優先度は国内の研究者にアンケートを行ってその結果を考慮するという。現在約 4,500 人から回答があり、Couperin では 5,000 人の回答を期待しているという。ISTEEX プロジェクトスタート前からフランスはバックファイルの購入を行っては来たが、これからさらにバックファイル整備の先進国であるドイツ、イギリスと協力し、交渉のノウハウを学びながらバックファイルの購入を進めるということである。

4.2 News from the Battlefield II (セッション2)

NEICON (ロシア)⁶⁾、Couperin (フランス)、SURFmarket (オランダ)⁷⁾、ANKOS (トルコ)⁸⁾ の各コンソーシアムから、コンソーシアムの概要説明および出版社との協議・交渉結果について事例報告が行われた。各国毎に特筆すべき動向を以下に述べる。

① NEICON (ロシア)

政府の補助金が減少する中で、学会系電子ジャーナルの不当な値上がりと為替レートの変動から、ライセンス契約を縮小せざるを得ない状況にある。

② Couperin (フランス)

国の財政危機により図書資料費が 2013 年は 10% も削減される。コンソーシアムとして価格上昇率を 0% に設定したガイドラインを出版社に提示し、交渉に臨んだ。ガイドラインに沿わない出版社の提案は拒否し、今後は OA に向けた展開を考えている。

③ SURFmarket (オランダ)

柔軟なモデルの提示や価格上昇率を 0% とするよう各出版社に要求し、また複数年契約を取ることによって価格上昇率を抑制する方策を講じた。また、APC の機関一括払いや割引交渉も行った。

④ ANKOS (トルコ)

複数年契約を行うことで価格上昇率を抑制すると共に、トルコの学協会、商業出版社をサポートして行きたい。

4.3 The Stock Market View of STM Publishing with a focus on Europe (セッション3)

外部から図書館界を捉えるという視点から、「投資対象としてのヨーロッパの STM 出版社」というテーマで、フィナンシャルアナリストの Kassab 氏

(Exane BNP Paribas 社) が発表を行った。Kassab 氏は、前回の ICOLC デンバー会合に於いても発表されている。

近年の不況の中でも出版業、特に STM 分野の学術出版社は高い利益を上げており、収益増を維持している。収益増は価格上昇の他、新興国などの新しい市場の獲得、コスト削減、新製品の開発等企業努力により今後も加速していくこと、OA は短期的に現状を変えることは考えにくい、長期的には着実に増加して出版社に影響を与えるであろう、といった見解が述べられた。

投資家の立場から各国のコンソーシアムに対し、自国通貨での決済が有利であること、データベース・電子ブックなどのコンテンツを電子ジャーナル契約と絡めて長期契約することで有利な交渉結果が引き出せるだろう、といった助言が述べられた。

4.4 The Struggle for Value-Based Pricing (セッション 4)

JISC Collections (イギリス)⁹⁾ から、ACS が導入した従量制価格モデルについて、出版社側の視点と図書館側の視点の違いについて要点整理と問題提起がなされた。利用者側は論文投稿等で学術コミュニケーションに貢献しているし、利用により出版社の負担が増える訳ではないので、研究者に利用を抑制させるようなモデルは学術コミュニケーションにふさわしくないとの指摘があった。また、ヨーロッパは厳しい財政状況にあることを ACS は認識してほしいとのコメントもあった。

Bavarian Consortium (ドイツ) からは、ACS の従量制価格モデルへの 5 年間の移行措置を 2008 年から始めたが、Tier (契約の階層) の変更や CpD (Cost per Download : 1 ダウンロードあたりの価格) 格差の問題もあり、また New Titles が加わり価格が恒常的に上昇するなど持続可能なモデルとは言えないことから、2013 年も完全に従量制価格モデルに移行せずに、延長して 2017 年まで移行措置を続けるとの報告があった。

AAC (オーストリア)¹⁰⁾ からは、コンソーシアムで利用統計を用いることで出版社との価格交渉に成功した事例が報告された。

4.5 Reports from the Open Access Battlefield (セッション 5)

MPDL (ドイツ)¹¹⁾ の Schimmer 氏から SCOAP³¹²⁾ の進捗状況と今後のスケジュールについて報告があった。入札は完了し、高エネルギー物理学分野の 12 誌は 2014 年から OA 化されるため、

その分担金の試算ツールを提供するとのことである。

CARL (カナダ)¹³⁾ からは OA 契約問題タスクフォースの活動中間報告が、OAPEN-UK (イギリス)¹⁴⁾ からは人文社会系モノグラフを OA にするプロジェクトの概要報告があった。

SURFmarket (オランダ) の Verhagen 氏から「OA はこれまでとは別のビジネスモデルなのか、この過渡期を図書館は生き延びることができるのか」との問題提起があり、ハイブリッドジャーナルは図書館側が支払う購読料と研究者が支払う APC が重複して発生するので経済的ではないとの意見があった。

4.6 Future Trends in Licensing (セッション 6)

CRL (アメリカ合衆国)¹⁵⁾ の Okerson 氏から他のコンソーシアムとの連携について発表があった。今日、沢山の電子リソースやデータベースがあるなかで、利用者の幅広い要望をカバーするにはより多くの電子リソースが必要になり、そのためには共同ライセンスを試みるなど、コンソーシアムが大きくなる必要があるのではないかと述べた。Lyrasys (アメリカ合衆国)¹⁶⁾ は特に ARL (アメリカ合衆国)¹⁷⁾ との協力を重要視しており、さらに Project MUSE ではカナダのコンソーシアムと一緒に交渉し 2012 年はコスト削減を達成できたと述べた。

オランダの SURFmarket からは、コンソーシアムは電子リソースの価格交渉だけでなく、個々の図書館に適切な提案ができるようにサービスも拡充すべきだと発表した。

次にドイツの Schäffler 氏より、FTE などに代表される、価格の決定によくあるバンディング (階層分け) についてのアンケート結果の発表があった。これまでに JUSTICE を含む 12 のコンソーシアムから回答があったとのことである。従来は出版社の設定するバンディングに沿って価格が決められていたが、JISC Collections が独自にバンディングを設定し、出版社に交渉を求めたことが今回の調査の発端の一つであるという。また出版社側が利用統計のみでバンディングを決めることには否定的で、利用統計をどう適切に扱うべきなのかという問題が参加者に投げかけられた。

次に AULC (アメリカ合衆国)¹⁸⁾ より PDA (Patron-Driven Acquisition : 利用者駆動型購入方式) モデルでの電子ブックの購入について発表があった。AULC では、このモデルでの購入によりコストが削減できたうえ、購入した人文・社会科学系の電子ブックが良く利用されていることが高い利

用統計数値からわかった。一方で人文・社会学系の本は出版直後ではなく、ある程度年数がしばらく経ってから利用される可能性もあるため、PDA モデルで購入できる期間を長く設定しなくてはいけないのかもしれないとのコメントがあった。

4.7 Consortia Business and their Future Role (セッション7)

コンソーシアムのこれからの役割について発表があった。オランダの SURFmarket はライセンス交渉だけでなく、ネットワークやソフトウェアの充実をはかる予定であり、また、今後はクラウド型サービスを展開したいと述べた。

FinELib (フィンランド)¹⁹⁾ は 2013 年 3 月から、現コンソーシアムを刷新し、電子ブックの選書方針の見直しや OA を推進することで、大規模な図書館から小規模なところまでサービスが行き届くようにしたいと述べた。コンソーシアム参加館にとって最善のサポートをしたいと考え、そのためには参加館とのコミュニケーションが最も大事だと述べた。

最後に Couperin から、今後の電子リソース購入方針について発表があった。フランスでは資料費の 90% を電子リソース購入に費やしている図書館の現状があるなか、Couperin は交渉から購入までの一連のプロセスを見直し始めた。具体的には交渉のガイドラインの制定、購入額や提供される製品やサービスの目標値設定、各参加館への予算調査などである。またボランティアベースで交渉を行っている図書館員とは毎年冬期に会議を行っており、交渉は 1 月からスタートし、6 月には合意に達することを目標としている。交渉結果はゴールド (良い交渉と評価)、シルバー (概ね良いと評価)、合意、交渉決裂とラベルを付している。また契約期間は 3 年以下とし、それ以上の契約期間は設定しない方針であると述べた。

デンマークでは出版社との交渉業務を行う人材や資金が不足し、コンソーシアム活動がうまくいかないとの発言があり、他の参加者からはそれでも持続可能な活動を行うため、コンソーシアムは様々な試みを続けていくべきだろうとの意見が出された。

またライセンス問題は事情が複雑である一方、その活路を OA に求めるべきではないかと発言があった。それに対し、OA はなぜ思ったよりコストがかかるのか、我々はなぜ何年もライセンスと OA の話ばかりをしているのか、もっと研究者のために何をすべきなのか考える必要があるという意見がだされた。その後 OA に関してしばらく意見交換が続き、OA の可能性に期待する発言や、Gold OA

(著者が論文投稿料を負担するモデル) は予想以上にコストがかかるといった感想も出された。

4.8 Breakout Sessions (セッション8)

事前に提示された 4 つのテーマについて、10 名から 20 名程度の分科会形式 (各 2 回) で情報交換が行われた。テーマと参加者、セッションの様子は以下の通りである。

- ① ビック・ディールに留まるべきか否か (高橋参加)
- ② PDA モデルは経済的か (高橋参加)
- ③ 5% の価格上昇率についての賛否 (柴田参加)
- ④ SCOAP³ への購読料のリダイレクトを試算 (柴田参加)

① ビック・ディールについてはその起源、諸問題、代替モデルの可能性について情報交換が行われた。予算削減のなか、ビック・ディールを維持するのは各国とも難しい状況にあるため、移管誌等の扱いに柔軟性を求めた事例や PPV (Pay Per View) やドキュメントデリバリーによる代替モデルを模索している事例等が報告された。

② PDA については、セッション 6 での AULC の発表をもとにその経済性が議論された。アメリカの AULC では成功した PDA であるが、イギリスのコミュニティカレッジで試験的に実施したところ、予想を上回るダウンロードがあり予算が逼迫したとの報告もあった。実施する際には、機関の規模・形態・利用統計・資料選定基準などを分析し、適切なプロファイルを作成することが重要との結論に至った。

③ では「価格上昇の 5% は適当か否か」というテーマがディベート形式で行われた。価格が上昇する理由としては ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) などに投資するコストがかかるため、ゆくゆくは利用者の利益になるとして 5% は是だという意見と、出版社がそういった技術投資をすることに対し、利用者 (契約・購入者) がそのコストを支払うのは間違いで、価格を上昇させるべきではないという意見に分かれた。参加者からは、雑誌が学術コミュニケーションに不可欠であり、そのコストを図書館界が支えなければならないという意見が出される一方、価格を上昇させるべきではないという意見も多く、予算削減の状況でとても余裕がないとの声もあった。

④ 前述の SCOAP³ により、高エネルギー物理学分野のジャーナル 12 誌が 2014 年から OA 化される。そのための資金を国ごとに分担することになるが、この分科会においては分担金への購読料リダイレク

トの試算ツールが提示され、実際に各機関でどれくらい費用が発生するかが提示された。

各大学がOA化する雑誌のタイトルをどのように購読しているかによって、選ぶシナリオが異なり、実際に現在の契約金額をいれると2014年の支払額が明らかになるというしくみである。このセッションに参加したのは15人と少数であったが、あまりSCOAP³に詳しくないコンソーシアムも積極的に質問が出されていた。

4.9 Breakout Sessions Summaries, ICOLC ACS-Strategy Task Force (セッション9)

前セッションで実施された分科会のまとめが各モデレーターより発表された。

引き続き、ACSの従量制および価格上昇率に対し、ICOLCとして何らかの戦略を練るためにタスクフォースを形成し、具体案を検討していくことになった。

4.10 Latest from Continent Consortia (セッション10)

ヨーロッパのコンソーシアムの最近の取組などの発表があった。BICfB (ベルギー)²⁰⁾は、Web of ScienceとScopus製品について、キャンセル後のアクセス等について両製品を比較、評価した結果を発表した。

次にCristin (ノルウェー)²¹⁾からは、コンソーシアムの活動について説明があった。日本のコンソーシアムと同様、ライセンスやOAの推進を行い、独自のプラットフォームを利用して、利用者に購読誌、OA誌ともどちらもメタデータを検索できるようにしたとのことである。

最後にオランダのSURFmarketからはエルゼビアと現在おこなっているOpen Archiveプロジェクトの試行について、その経過説明があった。来年には結果が報告できるということだが、参加者の関心は高そうだった。

4.11 JSTOR Grille Follow-up from Denver: Bruce Heterick; Vice President of ITHAKA (セッション11)

JSTORは前回の北米会合でも、グリルに参加しており、今回は前回と同じJSTORの現状と今後のビジネスモデルの説明があった。さらにデンバー会合で挙がった意見を元に、それに対するJSTORの今後の姿勢について説明があった。

それによると、今後JSTORは従来のモデルだけでなく新たな購読方法を考えていること、Library Advisory Groupを作り図書館員からの意見を集め

ていくとのことだった。参加者の反応はデンバー会合より比較的穏やかだった。

4.12 General Business Session (セッション12)

今回の会合のまとめの他、最後のセッションではACSタスクフォースについて説明があった。ACSが提示している今回のUsageモデルは一方的で「間違った(Wrong)」モデルであるとし、ICOLCとしてACSに文書を送るつもりだとの報告があった。

最後に次回のICOLC秋季欧州会合は2013年10月13~16日にリトアニアの首都ヴィリニウス、Vilnius Universityで開催予定であると発表された。

5. おわりに

今回の欧州会合では、OAメガジャーナルの興隆や、SCOAP³などにより学術情報流通そのものが進化していき、その結果コンソーシアムや図書館の役割が変化していくのではないかといいことが盛んに議論された。それによって、これまでの自国のコンソーシアムの活動の枠を越えて、他国のコンソーシアムと協力していく事例が数多く紹介された。欧州会合はヨーロッパからの参加が多いために、このような国を超えた事例を知るには良い機会である。

役割の変化とは違うベクトルではあるが、大きな動きとしては出版社が従量制価格モデルを導入することにより、各図書館では支払価格が激変することも予測され、ICOLCとして何らかの戦略を立てなければならぬという結論に至り、タスクフォースが形成された。こういった世界的なコンソーシアムの動きと協調してJUSTICEも新たな戦略を練ることができるのではないかと考える。

欧州会合は北米会合と比べてOAに関するトピックや議論が盛んなところであると言える。今回OAに関してコンソーシアムの積極的な取組が発表される一方で、その困難さも議論された。

また、OA化が進展しても、APCの価格交渉など、コンソーシアムとして対応すべき課題は山積している。ビック・ディールの破綻の現実性もまたコンソーシアムの大きな問題である。出版社に対し何らかの交渉カードを持ち、柔軟なモデルの提示を要求しつつ、研究者に満足いく研究環境を維持していくことがコンソーシアムの使命であると考え。今後も世界のコンソーシアムとコミュニケーションを取りつつ、わが国の学術情報の基盤整備と流通に貢献したいと考える。

謝辞

最後になりましたが、参加の機会を与えてくだ

さった国公私立大学図書館協力委員会，国立大学図書館協会，公立大学協会図書館協議会，私立大学図書館協会をはじめとする関係者の皆様に感謝いたします。

注・参考文献

- 1) 2011 年までの会合の報告は下記報告及びその注 1) ~19) を参照されたい。
今村昭一，柴田育子. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2011 年秋季会合参加報告. 大学図書館研究. 2012, no. 94, p. 58-69.
小野理奈，柴田育子，西脇亜由子. 国際図書館コンソーシアム連合 (ICOLC: International Coalition of Library Consortia) 2012 年春季会合参加報告. 大学図書館研究. 2012, no. 96, p. 43-48.
- 2) ISTEEX. (online). <http://www.istex.fr/>, (accessed 2012-12-17).
- 3) なお，本文中のコンソーシアム名の表記については，初出時にコンソーシアム略称（地域名など）とし，適宜注を付している。
- 4) Couperin (Consortium Universitaire des Publications Numériques). (online). <http://www.couperin.org/>, (accessed 2012-12-17).
- 5) ABES (l'Agence Bibliographique de l'Enseignement Supérieur). (online). <http://www.abes.fr/>, (accessed 2012-12-17).
- 6) NEICON. (online). <http://www.neicon.ru/>, (accessed 2012-12-17).
- 7) SURFmarket. (online). <http://www.surfmarket.nl/Paginas/Default.aspx>, (accessed 2012-12-17).
- 8) ANKOS (Anatolian University Libraries Consortium). (online). <http://www.ankos.gen.tr/>, (accessed 2012-12-17).
- 9) JISC Collections. (online). <https://www.jisc-collections.ac.uk/>, (accessed 2012-12-17).

- 10) AAC (Austrian Academic Consortium). (online). <https://www.konsortien.at/>, (accessed 2012-12-19).
- 11) MPDL (Max Planck Digital Library). (online). <http://www.mpdl.mpg.de/>, (accessed 2012-12-19).
- 12) SCOAP³ (Sponsoring Consortium for Open Access Publishing in Particle Physics). 高エネルギー物理学分野 (High Energy Physics: HEP) の査読付きジャーナル論文のオープンアクセス化を実現することを目的とした，国際連携プロジェクト。
- 13) CARL (the Canadian Association of Research Libraries). (online). <http://carl-abrc.ca/en.html>, (accessed 2012-12-19).
- 14) OAPEN-UK. (online). <http://oapen-uk.jiscebooks.org/>, (accessed 2012-12-19).
- 15) CRL (Center for Research Libraries). (online). <http://www.crl.edu/>, (accessed 2012-12-19).
- 16) Lyrisys. (online). <http://www.lyrisys.org/>, (accessed 2012-12-19).
- 17) ARL (Association of Research Libraries). (online). <http://www.arl.org/>, (accessed 2012-12-19).
- 18) AULC (Arizona Universities Library Consortium). (online). <http://icolc.net/consortia/123>, (accessed 2012-12-19).
- 19) FinELib (The Finnish National Electronic Library). (online). <http://www.nationallibrary.fi/libraries/finelib.html>, (accessed 2012-12-20).
- 20) BICfB (Bibliothèque Interuniversitaire de la Communauté française de Belgique). (online). <http://www.bicfb.be/>, (accessed 2012-12-20).
- 21) Cristin (Current Research Information System In Norway). (online). <http://www.cristin.no/english/>, (accessed 2012-12-20).

< 2012.12.26 受理 たかはし まさえ 上智大学学術情報局図書館学術情報チーム，しばた やすこ 一橋大学学術・図書部学術情報課雑誌情報係 >

Masae TAKAHASHI, Yasuko SHIBATA
Report of the ICOLC, 2012 Autumn Meeting

Abstract : The 2012 Autumn Meeting of the International Consortium of Library Consortia (ICOLC) was held in Austria. The program had a total of 12 sessions, including evaluations of publishers from the perspective of investors, value-based pricing models, open access, future roles of consortia, discussions about big deals, activities of consortia in Europe, JSTOR grille, and reports about SCOAP³ activities. This paper provides an overview of the sessions.

Keywords : library consortia / International Consortium of Library Consortia / ICOLC / e-journals / e-books / cooperative licensing / value-based pricing / open access / big deals / APC / PDA